

【言い訳は続くよ どこまでも】

おじいちゃんはおとうさんのおとうさん。近くのアパートにひとりで暮らしてる。

おとうさんは会社、おかあさんはパートで、家にはいないから、学校が終わったら、ぼくはおじいちゃんのアパートに行く。

手を洗ってうがいして、テーブルの前の椅子にすわったら、麦茶とおせんべと南京豆が出てくる。ぼくは学校であったことを話す。

「きょうな、ユウちゃんが先生の机の上にあった花瓶を落として割ってしもてん」

「手エでもあたってんか？」と、おじいちゃんが南京豆の皮をむきながらたずねる。

「うん、ふざけて踊るまねをしてて、手エがあたってん。そやけどな、先生たずねられたとき、ユウちゃん、踊るまねをしてたなんてひとこともいわんと、『宇宙は広いゆうて手をひろげたらあたりました』ゆうてん。そらたしかに、そうゆうふうな歌詞やってんけどな」

「お、うまい言い訳やなあ。まるっきりうそ、ちゅうわけやないところがうまいなあ。そしたら先生、どないいいはった？」

「しばらくユウちゃんの顔を見てからためいきをついて、今度から気イつけや、いいはった」

おじいちゃんは笑った。

「なるほどなあ、相手が宇宙では、先生もおこりにくかったんやなあ。まあ、2年生の教室で、落としやすいところに花瓶を置いてたちゅうのも、先生、気がとがめはったんかもしれへんな」

おじいちゃんはむいていた南京豆を5、6個かためて口にほりこんで天井を見た。いままでの経験から、こういうときはなにか考えているとぼくは思った。

やっぱりそうやった。なにか考えついたらしい。おじいちゃんはひとつうなずいてから麦茶を飲んで、こうきりだした。

「おじいちゃんが小学校のときの友だちにな、おもしろい言い訳をする子がおった」

「おもしろい言い訳？」

ぼくが首をかしげると、おじいちゃんほうなずいた。

「おまえの友だち、ユウちゃんの言い訳は、ほんまのことをごまかしてるけど、うそをついてるわけやないやろ。おじいちゃんの友だち、ツクローくんの・・・」

「ツクローくん、ゆうのん？」

いま作った名前みたいや。

「そうや。ツクローくん。あかんか？」

「いや、あかんことない」

「せやろ。このツクローくんの言い訳は、どう聞いてもほんまのことやとは思えなんだ」

「どんな言い訳、したん？」

「うん」。おじいちゃんほううひとくち麦茶をのんだ。